

詩

磯村英樹

下松市
(1922～2010)



【著作】

詩集『したたる太陽』（昭和38・地球社）
詩集『水の女』（昭和46・アポロン社）
詩集『朝奏楽』（平成4・飛天詩社）ほか

【関連情報】 磯村英樹詩碑案内

下松市米川米泉湖文学碑プロムナードにあり。

【閲覧情報】

地元下松市や周南市の図書館でも詩集を読むことはできるが、県立山口図書館には全詩集と著書が完備されている。
なお周南市立中央図書館には、彼が活躍した詩誌『駱駝』のナンバーがそろっている。

磯村英樹は下松市出身の父親の赴任先東京で、大正十一年（一九二二）六月八日に生まれた。二歳のとき母親が亡くなり、下松の母の実家で祖母や叔母（のちに継母となる）に育てられる。五歳の頃、父が買ってくれた幼児雑誌『コドモノクニ』の創作童謡により初めて詩に触れる。因みに彼の父親は海軍軍楽隊員（後に楽長）で、幼いときから感性に恵まれた環境に育った。しかし六歳のとき今度は頼りにしていた父が亡くなり、絶望の淵に立たされる。母の実家、父の本家と変わる環境の中で彼は九歳のとき、「こほろぎ」という詩を雑誌帳に書き付けていた。これが彼が詩を書く最初のかかりである。磯村は詩との出会いを『駱駝』誌に書き残している。

「そのとき私の両親は疾うに死んでいた。実母のように慕う継母とも別れて暮らしていた。その愛の飢えも私にとって最初の詩らしいものを書かせる動機となった。」

昭和十八年（一九四三）二十一歳のとき小倉の野戦重砲隊に入隊。満州東北部やビルマ（現・ミャンマー）戦線を転戦後敗戦を迎え、同地で強制労働に服し、昭和二十一年（一九四六）復員。この過酷な体験は彼に「人間解放」という宿命を背負わせた。彼は同じような戦歴をもつ磯永秀雄と出会うや共鳴し、絶望克服と正統詩の確立を旗印に詩誌『駱駝』を立ち上げ、人間の始原性を追求する歌を書きつづけた。

磯村は一般的には「エロス（性愛）の詩人」と呼ばれる。幼き日に別れた母に対する追慕が原因であろう。しかし彼の本位は人間の生き方の原型を探りながら、宇宙エネルギー源から強烈な放射を受けることで、そこから生まれる祈りの詩が最も力強く美しいという。

彼は転勤で上京すると大きく羽ばたき、昭和三十八年（一九六三）には彼が最も尊敬する室生犀星の詩人賞を受賞し、その後は日本現代詩人会理事長や会長をつとめ、我が国短詩型文学界のために活躍しながら、数多くの詩集を残した。彼の課題は、抒情性や音楽性を脱ぎすてた現代詩人の中から戦前の島崎藤村や北原白秋、西条八十などのような国民的詩人を輩出することであった。六十歳以降は妻の介護に徹しながら詩作も続け、妻の最期を看取る。その五年後に自らも病を得て死去。享年八十八歳。

生涯十五冊の詩集と一冊の著書を残した。

（文・田村悌夫）



下松市米川米泉湖の文学碑プロムナードにある磯村英樹詩碑



著書・詩集・詩稿・直筆色紙

ふるさとの小川は
ふるさとの小川は、いまでも
澄んで流れているだろうか
さらさら　さらさら　と音もなく
白砂を運んでいるだろうか
さゆるさゆる　さゆるさゆる　と忙しく
川底の玉石を磨いているだろうか
すばやい鮠の子たちを
光の紐で捕えたり放したりしているだろうか
夕月の影をこころなかに碎きながら
ミソハギの白い根を洗っているだろうか

少女に逢う日
燃える肌を浸して漱ぎ浄めたあの朝のままに
沁みとおるように冷たいだろうか
戦さに出で立つまえを
眠れなかった一夜のように
かなしい子守歌をつたっているだろうか
ふるさとの小川は　いまでも
澄んで流れているだろうか
わたしの中を
ひとすじに流れつづけているそのように…
（詩集『水の女』より）

磯村英樹 年譜

（提供・田村悌夫）

大正11（一九二二）年	
大正13（一九二四）年	二歳
昭和2（一九二七）年	五歳
昭和3（一九二八）年	六歳
昭和6（一九三二）年	九歳
昭和11（一九三六）年	一四歳
昭和15（一九四〇）年	一八歳
昭和16（一九四一）年	一九歳
昭和18（一九四三）年	二一歳
昭和20（一九四五）年	二三歳

6月8日、東京市芝区新銭座町一六（現、浜松町）に父準一・母八重の長男として生まれる。父は海軍軍楽隊員（後に楽長）、両親とも山口県下松市出身。
母八重死去。下松市花園の母の実家に預けられ、祖父母と母の末妹トシコに育てられる。
父準一、トシコと再婚。この頃父が買ってくれる『コードモノクニ』の創作童謡により詩に触れる。
10月、弟礼二郎誕生。11月、父準一急死。
はじめて「こほろぎ」という詩を雑誌帳に書く。
4月、下松工業学校応用化学科入学。母方の叔父が残した改造社の『日本文学全集』を読みふける。
水原秋桜子の『現代俳句論』を読み俳句を志す。叔父の通夜の席で初めて句を作り、戦後まで俳句を続ける。
3月、下松工業卒業。日本石油下松製油所入社。10月、鈴木花蓑選「朝日俳壇」に初入選。
小倉・野戦重砲隊第五聯隊に入隊。7月、ソ満国境の関東軍に配属。日石社内報俳壇（加藤楸邨選）に陣中俳句を送る。
敗戦。ビルマ（現・ミャンマー）で英・印軍に武装解除され、道路建設の強制労働に服す。図囊に秘めた長谷川素逝句集と虚子歳時記が支えとなる。

昭和21（一九四六）年	二四歳
昭和22（一九四七）年	二五歳
昭和24（一九四九）年	二七歳
昭和25（一九五〇）年	二八歳
昭和26（一九五一）年	二九歳
昭和27（一九五二）年	三〇歳
昭和32（一九五七）年	三五歳
昭和33（一九五八）年	三六歳
昭和35（一九六〇）年	三八歳
昭和38（一九六三）年	四一歳
昭和46（一九七一）年	四九歳
昭和48（一九七三）年	五一歳
昭和51（一九七六）年	五四歳
昭和52（一九七七）年	五五歳
昭和54（一九七九）年	五七歳
昭和57（一九八二）年	六〇歳
平成4（一九九二）年	七〇歳
平成5（一九九三）年	七一歳
平成17（二〇〇五）年	八三歳
平成22（二〇一〇）年	八八歳
平成23（二〇一一）年	

ビルマのムドン捕虜収容所抑留。6月、復員船乗船。船中で、歳時記全頁読了。7月、大竹入港。日本石油復職。中村草田男主宰「萬緑」に投句。棟居和江と知り合い、恋愛詩を書き始める。
郷土文芸誌『あけぼの』に俳句、短歌、詩投稿。7月、磯永秀雄をリーダーとする「あけぼの詩話会」に出席し、詩誌発行を打ち合わせる。
4月、磯永を中心に弟礼二郎、小野静枝、玉木帛子、丸岡忠雄らと詩誌『駱駝』創刊。以後『駱駝』が活躍舞台となる。
3月、棟居和江と結婚。母を弟に託し、新居に住む。
11月、第一詩集『天の花屑』（序文・田中冬二）刊行。
4月、日本石油本社（広報室）へ転勤。山之口獺、草野心平、山本太郎、川崎洋らと初めて会う。
6月、第三詩集『生きものの歌』刊行。「現代詩の会」入会。長女ひかり誕生。
日本現代詩人会入会。吉野弘と昼休みに皇居前で安保反対デモに参加。安西均、石垣りんらと「ワスレナグサの会」結成。
9月、第五詩集『したたる太陽』刊行。本詩集で第三回室生犀星詩人賞受賞。
10月、第七詩集『水の女』刊行。長男冬樹交通事故死（一八歳）。
日本現代詩人会理事長に就任（二年）。10月、第八詩集『水の掣り』（長男冬樹追悼詩集）刊行。
7月、磯永秀雄急逝により、「一四八号を追悼号として『駱駝』終刊。11月、女性同人詩誌『らくだ』創刊され客員。日本石油定年退職。ドイツ・スイス・フランス文学旅行、フイジー諸島、セブ島（比）へ取材旅行。
再度日本現代詩人会理事長就任（二年）。1月、第九詩集『いちもんじせせり』刊行。9月、『文壇資料・城下町金澤』刊行。
第十二詩集『ギリシャの夏』刊行。この頃妻和江が若年性アルツハイマー病発症。以後晩年まで自宅介護を続ける。
11月、第十四詩集『朝奏楽』刊行。
日本現代詩人会常任理事から会長就任（二年）。
二十余年介護した最愛の妻死去。
10月29日心不全により自宅にて急逝。
3月10日、女性同人詩誌『らくだ』（一三四号）が「磯村英樹追悼号」となる。

※『磯村英樹詩集』（土曜美術社）参照

磯村英樹